

# 1週間の中干し延長が「ヒノヒカリ」の生育・収量・品質に与える影響

1週間の中干し延長によって、収量が減収するリスクは小さい

## 背景・目的

- 農業分野においても環境負荷低減に向けた取組が求められています。
- 地球温暖化係数の高いメタンの発生量は稲作由来のものが最も多く、従来の中干し期間を7日間延長することでメタンの発生量を抑制できる「中干し延長技術」の重要性は増しています（図1）。
- 本県で作付される主要な品種である「ヒノヒカリ」において、中干し延長を実施し収量や品質に与える影響を検証しました。

## 成果の内容

- 中干し延長によって茎数及び穂数が減少する傾向です（表1）。
- 中干し延長することで登熟歩合が高まる傾向にあり、精玄米重は慣行並みからやや多収となります（図2）。

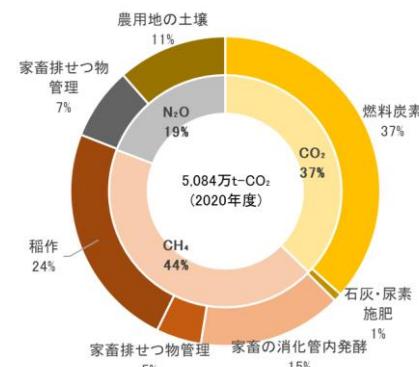


図1 日本の農林水産分野のGHG排出量  
(出典:農林水産省「水稻栽培における中干し期間の延長」のJ-クレジット制度についてから作成)

表1 中干し延長による茎数・穂数への影響

年度	区分	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	穂数 (本/m <sup>2</sup> )
2022年	ヒノ前7延長	438	394
	ヒノ前3後4延長	522	402
	ヒノ後7延長	495	377
	ヒノ慣行	544	517
2023年	ヒノ前7延長	372	350
	ヒノ前3後4延長	387	336
	ヒノ後7延長	416	375
	ヒノ慣行	380	361

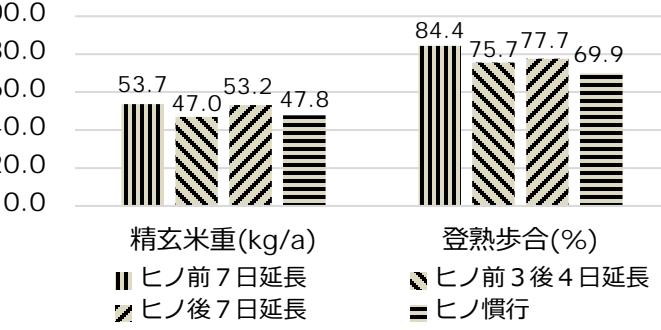


図2 中干し延長による収量・登熟歩合への影響  
(2ヶ年平均)

## 成果の活用方法(又は期待される効果)

- J-クレジット制度の活用に向けた行政施策立案時の検討資料となります。
- 中干し延長は従来の中干し期間の前後1週間にわたり、田面が過乾燥とならない期間（降雨が予想される）を選択できます（図3）。

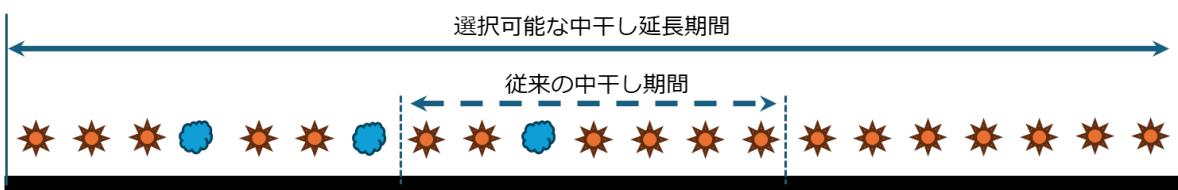


図3 中干し延長の有効的な活用方法

## 留意点

- 中干しを延長することで穂数が減少し減収するリスクがあります。
- 中干し期間の気象条件によって、生育及び収量に与える影響の大小は変化します。
- 田面の過乾燥による過度なストレスが生育に影響を及ぼす恐れがあります。
- ほ場によって雑草の発生量が多くなるため、注意が必要です。
- 試験ほ場は試験場内水田（灰色低地土、埴壤土）です。